

フェルガナ州（ロシア領中央アジア）の民族状況 —1917年統計資料にもとづいて— Ethnic Situation in Fergana Oblast (Russian Central Asia): Based on the Census Data of 1917

島田 志津夫

SHIMADA SHIZUO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

Quadrante, No.19, (2017), pp.191-204.

訳者解題

現在のウズベキスタン、キルギス、タジキスタンの3カ国にまたがるフェルガナ地方は、中央アジアにおいてもっとも人口密度の高い地域である。その理由は、独自の地形と地理的条件がもたらす土地の豊饒さにある。ここでいうフェルガナ地方とは、フェルガナ盆地を中心にその周りを取り囲む山地から構成される地域を指す。

フェルガナ盆地は、東西約300km、南北約170kmの大きさに広がり、四方のほぼすべてを3,000～4,000m級の山脈が取り囲み、西側にわずかに平地への出口を持つ巾着型の形状をした盆地である。周囲の山々からは雪解け水を集めたナリン川、カラダリヤ川、ソフ川、イスファイラム川、カーサーン川などが流れ込み、合流して中央アジアの二大河川の一つであるシル川となって盆地を東西に貫流している。これらの河川が山地から盆地に流れ込む際に扇状地を形成し、農業に適した肥沃な土壌を創り出している。また、人々は古くからこれらの河川を利用して灌漑をおこない、農地を増やしてきた。

このような豊かな土地に、長い年月を通じて様々な民族が来住したとしても不思議ではないであろう。実際にフェルガナ地方は、多民族が暮らす中央アジアにおいても、とくに多くのエスニック集団が居住する地域となった。その結果、人口稠密な空間に様々なエスニック集団がモザイク状に入り交じって生活しているこの地域では、しばしば民族間の衝突も起こることになった。たとえば、1989年のフェルガナ事件（ウズベク人対メス

フ人）、1990年のオシュ事件（キルギス人対ウズベク人）、2010年のオシュ騒乱（キルギス人対ウズベク人）は流血の惨事に発展し、多くの犠牲者が出た（小松・後藤 2009: 92）。

また、これらの民族間衝突がソ連時代末期からとくに表面化し始めたことから、その背景にはソ連時代の民族政策の矛盾があるとみなすこともできる。1924年の中央アジアにおける民族別国境画定が、ソ連時代の中央アジア諸民族に対する民族政策において非常に重要な役割をはたしたということは、すでに指摘されてきているとおりである（帯谷 2012; 島田 2016: 305-308）。ソ連中央政府の主導によりおこなわれたこの民族別国境画定によって、現在の中央アジア諸国の国境線と民族カテゴリーの原型ができあがったといえる。とくにフェルガナ地方においては、国境画定により非常に入り組んだ複雑な国境線が引かれ、それまで地理的にも経済的にも一体性を持っていたこの地域が三つの共和国に分割される結果となった。

以上のようなフェルガナ地方における民族問題、ひいては中央アジア地域の民族問題を考える上で重要なのは、民族別国境画定以前のこの地域の民族状況の実態を理解することである。そこで、今回はこうした作業の一環として、1917年にフェルガナでおこなわれた人口統計調査にもとづく資料を訳出（抄訳）¹した。ここに取り上げるのは、『全

¹ 訳者が入手できたロシア語原文のマイクロフィルムからのコピーには文字が不鮮明で判読不能な箇所がしばしばあり、訳文ではそのような箇所は省略せざるをえなかった。また、一部煩瑣なデータと思われる部分は訳者の判断で省略した。



ロシア人口調査資料集：トルキスタン共和国における人口統計 第4分冊 1917年の人口調査資料にもとづくフェルガナ州の村落民』（タシュケント1924）のうち「第4章 住民の民族・性別・年齢構成」²の民族構成にかんする部分である（МВП 1924: 42-57）。

帝政時代のロシア領トルキスタンの行政区分にもとづくフェルガナ州の領域は、1876年のコーカンド・ハン国滅亡によりロシアに併合されたフェルガナ盆地と周囲の山地、および1900年代にロシアの支配下に入ったパミール地方からなっていた。ただし、フェルガナ盆地の出入り口にあたるフジャンド地域はサマルカンド州に属し、フェルガナ州には入っていなかった。ロシア領トルキスタンにおける地方行政単位は、規模の大きいものから順に州（область）＞郡（уезд）＞郷（волость）＞村団（сельское общество）＞村（кишлак）となっていた（МВП 1924: 1-2）。フェルガナ州には、アンディジャン郡、コーカンド郡、ナマンガン郡、オシュ郡、フェルガナ郡の五つの郡とパミール管区の行政区分があった。

この資料は、ロシア革命の年である1917年にフェルガナ州で実施された村落人口調査データにもとづく報告書であり、各郡の地理的な一般情報、生業（農業と遊牧）や民族にもとづく村落形態、世帯数や人口密度、人口構成などについて豊富なデータ表とともに記述されている。また、付録として村単位の様々な人口統計データ表が付されている。なお本書の序文によれば、予算上の都合によりオシュ郡での調査は完遂できず、データが不十分であるという（МВП 1924: I-II）。

当時の民族名称については、本文からもわかるとおり、現在の民族区分とは大きく異なっていた。たとえば、本書ではフェルガナ州に居住していた主要エスニック集団としてウズベク人、サルト人、カラ・キルギズ人、タジク人、カラカルパク人、キプチャク人、ロシア人などの名が挙げられている。

このうちカラ・キルギズ人は、現在のキルギス人（クルグズ人）に相当する。当時、現在のカザフ人とキルギス人を総称して「キルギズ人」と呼

び、両者を区別する必要がある場合には「キルギズ・カザク人」（＝カザフ人）、「カラ・キルギズ人」（＝キルギス人）と呼んだ。訳文では当時の用法を正しく理解するために、現在の名称である「キルギス人」や「カザフ人」とは直さずに、原文にある形のままでカナ書きした。そのため、ただ「キルギズ人」とのみ書かれ、文脈からはどちらの民族か判断しがたい場合もそのままの形で残されている。

本文中の「ウズベク人」と「サルト人」の関係についての指摘も興味深い。侮蔑的な意味を持っていたサルトの呼称を嫌い、ウズベクと自称し始めたことについては、1897年と1917年の統計データに如実に表れている（МВП 1924: 43）。すなわち、1897年のデータではサルトと自称する人口のほうが多かったのに対し、1917年にはウズベクと自称するほうが多くなり逆転するのである。このことは、当時の定住民の間で民族的な帰属意識が曖昧で変化しやすかったことをよく物語っている。

また、本書では、キプチャク人やカラカルパク人、クラーマ人について、定住生活をしていたにもかかわらず、遊牧的な出自から部族的意識を保持していたエスニック集団として記述されている。彼らはソ連時代以降「ウズベク人」に吸収されていくことになるが、現在あるような民族区分としての「ウズベク人」の形成過程を考える上で本書の記述は重要である。

当時の統計データは、1917年の時点においてフェルガナ州の「カラ・キルギズ人」の大半が定住生活を送っていたことを示している。出自的には遊牧民である彼らは、大半が定住生活に移行し、ロシア併合後の経済状況の変化により農業にも従事し始めていた（МВП 1924: 46）。フェルガナ州の村落は、ほぼ民族ごとに構成されており、土地の利用状況や地形によってその分布に特徴が見られた。すなわち、「河川の上流域には遊牧民、中流域には定住キルギズ人、下流域にはウズベク人が分布している」（МВП 1924: 52）という。この指摘は、帝政時代末期に山麓の冬营地付近でキルギス人（クルグズ人）による春蒔き小麦などの天水農耕が普及していたとする最近の研究成果とも一致する（植田 2013: 112-119）。

² IV. Состав населения по национальности, полу и возрасту

本書の出版年や序文に付された日付（1924 年 3 月 28 日）を考慮すれば、1917 年の人口調査の詳細なデータがこの時期に出版された意味は、まさしく 1924 年 10 月に実施された民族別国境画定の過程において実際に境界線を引く作業のための基礎データとして利用する意図があったに違いない。そうした意味でも、多民族の居住状況を具体的に示す本書は、中央アジアの民族問題を考える上で重要な意義を持っているのである。

訳文

第4章 住民の民族・性別・年齢構成

1. 民族別人口

フェルガナ州の村落民は、以下のような主要エスニック集団から構成されている。[表 27]

表 27 【主要エスニック集団人口】³

民族名	男性	女性	合計
ウズベクとサルト	606,326	498,053	1,104,379
カラ・キルギズ	197,532	163,631	361,163
タジク	90,988	76,420	167,408
キプチャク	23,079	19,370	42,449
カラカルパク	5,977	4,758	10,735
ロシア	8,898	8,357	17,255
その他	1,897	1,379	3,276
合計	934,697	771,968	1,706,665

フェルガナ盆地においてはウズベク人とサルト人の人口が圧倒的で、山間部では西パミールを除いてカラ・キルギズ人が多く、パンジ川とその支流域にはタジク人が多い。タジク人は州の西部、すなわちチャトカル山脈の山麓部、イスファラ川、ソフ川、カーサーン川、コク・テレク川、イスファイラム川流域にも多く分布している。カラカルパク人は、シル川流域、カラダリヤ川とナリン川の合流点で多く見られる。キプチャク人は、ナマングン郡中央部の山麓部、アンディジャン・サイ川とナリン川下流の沿岸部に住んでいる。ロシア人の集団居住地は、フェルガナ山脈の山麓部に見られる。

総じていえば、4 郡ではウズベク人とサルト人が圧倒的で、オシュ郡ではカラ・キルギズ人、パミール管区ではタジク人が多い。[表 28]

表 28 【村落民における民族構成】

民族名	各郡における村落人口						州全体合計
	アンディジャン郡	コーカンド郡	ナマングン郡	オシュ郡	パミール管区	フェルガナ郡	
ウズベクとサルト	237,662	320,518	181,626	71,465	29	293,079	1,104,379
カラ・キルギズ	107,625	16,258	54,586	125,689	2,693	54,312	361,163
タジク	2,928	67,597	39,773	762	19,397	36,951	167,408
カラカルパク	7,764	996	1,969	--	--	6	10,735
キプチャク	29,407	413	11,475	--	--	1,214	42,449
ロシア	6,524	2,330	1,220	4,298	2	2,881	17,255
その他	562	1,051	88	--	9	1,556	3,276
合計	392,472	409,163	290,677	202,214	22,130	390,009	1,706,665

民族名	各郡の村落人口における割合(%)						州全体合計
	アンディジャン郡	コーカンド郡	ナマングン郡	オシュ郡	パミール管区	フェルガナ郡	
ウズベクとサルト	60.6	78.3	62.5	35.3	0.1	75.1	64.7
カラ・キルギズ	27.4	4.0	18.8	62.2	12.2	13.9	21.2
タジク	0.7	16.5	13.7	0.4	87.7	9.6	9.8
カラカルパク	2.0	0.2	0.7	--	--	0.0	0.6
キプチャク	7.5	0.1	3.9	--	--	0.3	2.5
ロシア	1.7	0.6	0.4	2.1	0.0	0.7	1.0
その他	0.1	0.3	0.0	--	0.0	0.4	0.2

³ 表 27 の原文ではウズベクとサルトの女性人口の数値が 408,053、カラカルパクの合計人口が 50,735 となっているが、他表のデータとの対照から誤植と判断し、訳出の際に適宜数値を修正した。

2.1. ウズベク人とサルト人

フェルガナの村落部でもっとも人口が多いのは、ウズベク人とサルト人である。

ウズベク人：テュルク系の民族であり、14世紀にウズベク・ハン（チンギス・カンの末裔）の支配の下、さまざまなテュルク・モンゴル系遊牧民が合流して民族形成された。30年以上にわたり支配を続け、人々の間にイスラームの教えを確固たるものとしたこのハンの影響力は強大なものであった。彼の子孫に忠実な一族は、カザクと区別して自分たちをウズベクと呼び始めた。彼らがアム川とシル川の間の広大な領域を支配下におさめ、そこに定住化してもこの民族名称はそのまま残されているのである。

テュルク・イラン系の出自で、ウズベク語を話す古来からの定住民は、現在、サルトと呼ばれている。したがって、彼らは起源的にはウズベクと区別される。しかし、同一の宗教、言語、生業、生活形態により、彼らが一緒に住んでいるところでは両民族の完全な融合が起こっている。現在では、フジャンド、フェルガナ、タシュケントのウズベクは、それらの土地のサルトとまったく区別することはできない。

サマルカンド州のテュルク系定住民は、すでにずいぶん前から自分たちのことをウズベクと呼び始めていた。同様の現象は、現在、フェルガナ州とシルダリヤ州で観察される。数十万のサルトが自身のことをウズベクと呼び、自身の言葉をウズベク語と呼んでいる。彼らはもはや、自分たちを個別の民族だと思っておらず、研究者たちの考えに反してウズベク人との同一性を確信している。これと反対の現象はどこにも認められない。すなわち、サマルカンド州やブハラ、ヒヴァ、アムダリヤ州の純粋なウズベク人が自身のことをサルトと呼ぶような状況はなかった。

なぜ「サルト」の名称が消滅し、「ウズベク」に取って代わられているかの理由は明らかである。これまでサルト人がウズベク人と出会った土地ではどこでも、ウズベクが主導的な状況にあり、政治権力を手中に収めていた。ウズベク人の軍隊は河間地方を侵略した。ウズベク人とその同族のキ

プチャク人は、かつてのコーカンド・ハン国において絶大な権力を握っていた。ブハラ・アミールの王朝もウズベクの「マンギト」部族の出身である。遊牧ウズベク人は定住の農耕サルト人を軽蔑し、ウズベク農民（デフカン）はサルト商人を避けていた。「サルト」の語は、ウズベク人の言葉（キルギズ人も同様）においては侮蔑の意味を持っていた。多くのサルト人が、ウズベク人との間に何の違も見られないのに自分たちをサルトと呼ぶことをふさわしくないと思い始めたのは、当然のことである。

これまでサルト人だけが住民として数えられていた土地で、近年これほど多くのウズベク人が認められる理由はまさにここにある。17年の統計の不十分さによってこれを説明するのは不適切で、この現象は非常に一般的な性格を持っている。その証拠として、1897年と1917年の統計のウズベクとサルトの人口データを比べてみよう。[表 29]

表 29 【1897年と1917年の統計のウズベクとサルト人口の比較データ】

郡	統計年	ウズベク	サルト
アンディジャン郡	1897	--	176,451
	1917	159,708	36,184
コーカンド郡	1897	90,276	122,794
	1917	301,877	7,314
ナマンガン郡	1897	71	167,023
	1917	177,686	107
フェルガナ郡	1897	8,055	164,777
	1917	222,045	29,722
合計	1897	98,402	631,045
	1917	861,316	78,827

ウズベク民族の分派として、カシュガル人（カシュガル・サルトあるいはカシュガルリク）、テュルク人（tyurk, turk, turku）、ク라마人、アラブ人、ホジャが挙げられる。彼らの郡ごとの分布は以下のとおり。[表 30]

表 30 【ウズベク語話者の小集団人口（1917）】

郡	カシュガル人	テュルク	クラマ	アラブ	ホジャ	ユズ
アンディジャン郡	16,073	626	679	491	156	4
コーカンド郡	72	--	--	316	396	--
ナマンガン郡	483	203	645	--	--	--
フェルガナ郡	19,364	6,334	--	162	549	82
合計	35,992	7,163	1,324	969	1,101	86

トルキスタンにおいては、とくに中国領トルキスタンとカシュガリアからの移民たちが自身のことをカシュガル人と呼んでいる。彼らはウズベク語、すなわちテュルク語のチャガタイ方言を話す。彼らは、生活形態や言語、民族学的類型においてフェルガナの他のウズベク人と何ら違いはない。

テュルク人：おそらく、サマルカンド州のとくに山間部に見られるウズベクの多数部族。

「クラマ」の語は、「ならず者」を意味する。以前は、シル川中流域やその支流のアンGREン川とチルチク川の流域に住むすべての定住民をクラマと呼んでいた。現在では、タシュケント郡南東部、アンGREン川沿岸に住む農耕定住民(4万9697人)のみがクラマを自称している。フェルガナのクラマ人は、おそらく、フェルガナ盆地の奥に侵入し、そこに住み着いたこの部族の名残であろう。彼らは、定住のキプチャク人やカラカルパク人と同様に原住のウズベク人とほとんど同化している。

ほとんどすべての研究者たちの意見は、クラマ人が約200年前にサルト人とウズベク人と大中小オルダのキルギズ・カザク人との混合によって形成されたということで一致している。クラマ人の方言は、キルギズ・カザク語とウズベク語に似ている。クラマ人の生活形態はウズベク人のそれに近づきつつある。彼らは、自分たちの言語をキルギズ語やウズベク語と区別してクラマ語と呼んでいる。17年の統計では、クラマ人はアンディジャン郡のイズバスケント郷とナリン郷、ナマンガン郡のキルギズ・クルガン郷とウイチ郷で登録されている。

フェルガナのアラブ人は、たとえ彼らが実際に侵略者であるアラブ人の末裔であろうとなかろうと、まったくテュルク人と同化してしまい、ほとんどウズベク人そのものである。

ホジャたちは、自身をムハンマドの末裔と考

えている。おそらく、この集団は民族〔племя〕ではなく、社会階級であるといえる。というのも、彼らと周りの住民の間には民族的な差異はまったく認められないからである。彼らは自身の出自に優越感を持ち、周りの住民からは一線を画している。フェルガナ州においては、我々は彼らをウズベク人として統計を取った。というのも、彼らはウズベク語を話し、ウズベク人の農耕地域のみでその存在が認められたからである。

ユズ人：有力なウズベク部族の名残。1920年にはサマルカンド州で数千人の登録があった。

以下では、ウズベク語を話すすべての部族集団をただ「ウズベク」とのみ呼ぶことにする。

17年においてフェルガナ州のすべての村落地域で110万4379人のウズベク人が住んでおり、都市部では33万5205人(14年のデータ)が住んでいた。トルキスタンのウズベク人の半分以上が集中するフェルガナ州以外では、シルダリヤ州の南東部とサマルカンド州全域(キズィル・クム地区と南部の山岳地域を除く)に数十万のウズベク人が居住している。アムダリヤ州では、ウズベク人は人口数では二番目の集団を構成し(約5万人)、アム川下流域のもっとも肥沃な狭小な土地に分布している。セミレチエ州では、都市部に集住し、人口は約1万8000人である。

トルキスタン以外では、ウズベク人はブハラの一部に分布し、その人口は100万人を数える。ホラズム共和国には、およそ40万人が住んでいる。フェルガナとその周辺の地域も含めて、17年におけるウズベク人の総人口は400万人以上になるであろう。

それ以外に、多くのウズベク人がアフガニスタンと中国(カシュガリア)にも居住している。しかし、その正確な人口数は不明である。領事館報告や信頼のおける諸著者の情報によれば、アフガ

ニスタンのウズベク人口はおよそ 30 万人と推定され、カシュガル・サルト人の人口は 120 万人と推定される。

このように、現在、ウズベク人はオスマン・トルコ人に次いでもっとも人口の多いテュルク系民族である。トルキスタンとそれに隣接する諸地域に約 550 万人が住んでいる。

2.2. フェルガナ州におけるウズベク人の分布

コーカンド郡においては、ウズベク人は人口の多数を占め、その割合は 78.5%である。彼らは、15 の農村郷[оседлая волость]の主要住民である。他の三つの郷、すなわちクダシュ、マフラム、リシュタンでは過半数を占める(59~87%)。人口が少ないのは、カーニバーダーム郷(25.5%)とイスファラ郷(9.5%)である。

フェルガナ郡においては、ウズベク人の割合は 75%である。アルトゥ・アリク、カラテペ・チャウケント、ファイザーバード、ヤッカトウートの四つの郷では、ほとんどすべての住民がウズベク人である(90%以上)。11 の郷で人口の過半数を占める(60.5~90%)。アウヴァル郷では 36%で、タジク人人口より少ない。イチュキリクとナイマンのキルギズ郷では非常に少ない(1~4%)。

ナマンガン郡では、ウズベク人は村落人口の 62.5%を占める。ウズベク人口が非常に多いのは、ナナイ、テルガウチ、チュストの各郷である(71~83%)。チャダクでは、人口の半分強(51%)を占める。アシュト、ババ・ダルハン、ヴァルズイク郷では、タジク人口に次ぐ。バグシュ、バヤスタン郷ではキルギズ人口に次ぎ、9~40%を占めている。カーサーン、クトルク・サイド、アレクセーエフカ郷では少数派である。

アンディジャン郡では、ウズベク人の割合は 65.5%である。カラ・ダリヤとアンディジャン・サイ流域の五つの郷に多く居住している(60~77%)。クルガン・テペ郷では 48%を占め、アイム郷(43%)とバザール・クルガン郷(38%)ではキルギズ人口に次ぐ。

オシュ郡では、ウズベク人の割合は 35%である。ウズベク人は、ほとんどオシュ郷とウズゲン郷にのみ居住している。ブラク・バシュ(76%)とマニャク郷(57.5%)では過半数を占め、アク・ブ

ル(11.5%)、カシュガル・キシュラク(23%)、ナウカント郷(27.5%)では少数派である。

パミール管区では、ウズベク人にはホログの村やパミール哨所の近くで偶然出くわすのみである。

3.1. カラ・キルギズ人

カラ・キルギズ人あるいは彼らが自称する「クルグズ人」は、古来より天山西部で遊牧を行い、現在でもその地域に分布している。大部分の民族学者の考えによれば、彼らはテュルク民族と古代のこの地域の定住民、丁零[динлин](おそらくアーリア系)との混合により民族形成された。

他のテュルク系諸民族と違って、カラ・キルギズ人は住民の大規模な移住を伴う侵略や襲撃にほとんど参加せず、山地から離れることはめったになかった。これにより、彼らについての歴史的な情報は非常に少ない。

ただ、チンギス・カンの死後(13世紀初め)、天山西部とシル川までの土地を父から受け継いだチャガタイ・ウルスの支配下に入ったということが知られているのみである。チャガタイの子孫によるカラ・キルギズ人の支配は、16世紀後半まで続いた。

17世紀初め、カルムイク人[ジュンガル]が現在のトルキスタンの北部、シル川までを侵略したとき、カラ・キルギズ人はフェルガナの山岳地域とアライ山脈山麓に移動した。中国人によってカルムイク人が平定されると、カラ・キルギズ人の一部は天山にもどり、一部の部族はフェルガナに残って、しだいに定住化を始めた。

19世紀初め、フェルガナのカラ・キルギズ人は公式にはコーカンド・ハンによって征服されたが、実際には独立を保ち、長年にわたるウズベク人とキプチャク人の争いには参加しなかった。

カラ・キルギズ人は強力な政治機構を持たず、コーカンド・ハン国崩壊後もロシア人に対し反抗の意を見せなかった。1876年には最後のフェルガナのカラ・キルギズ部族がロシア人に服従し、その20年後にはロシア人は東パミールに侵入した。

カラ・キルギズ人は、その草原の隣人、キルギズ・カザク人ほどには人口が多くない。フェルガナ以外では、彼らはセミレチエ州南部とシルダリヤ州のアウリエ・アタ郡に多く住んでいる。タシ

ュケント郡とフジャンド郡の山地（フェルガナとの州境）、東ブハラ（カラテギン、ダルヴァーズ）、アフガニスタン（パミール地方とブハラとの国境地帯）、パミール東側の中国領（カシュガルの子ギル・ス上流部）では数千人のカラ・キルギズ人が見られる。トルキスタンとその周辺地域のカラ・キルギズ人の総人口は、およそ 65 万人と推定される。

山岳地域に居住していたカラ・キルギズ人は、トルキスタンにおける歴史の舞台から一線を画し、彼ら自身もそれにかかわることはなかった。この状況により、彼らは他のテュルク系、モンゴル系民族とあまり同化せず、数世紀にもわたって比較的純粋な血統を保つことができ、独自の遊牧生活を続けることができた。19 世紀半ばにいたるまで、彼らは 1000 年前と同様の状況にとどまっていた。カラ・キルギズ人は、ロシアによる侵略以降、経済状況の変化による影響の下でようやく農業に移行し始めたにすぎない。しかし、フェルガナのカラ・キルギズ人の多くは現在でも実際に遊牧をおこなっている。[表 31]

表 31 【カラ・キルギズの定住および遊牧人口】

郡	カラ・キルギズ人口	そのうち		割合(%)	
		定住	遊牧	定住	遊牧
アンディジャン郡	107,625	72,624	35,001	67.5	32.5
コーカンド郡	16,258	12,438	3,820	76.5	23.5
ナマンガン郡	54,586	30,679	23,907	56.2	43.8
オシュ郡	126,689	82,746	42,938	65.8	34.2
パミール管区	2,693	--	2,693	--	100.0
フェルガナ郡	54,312	51,394	2,918	94.6	5.4
合計	361,163	249,886	111,277	69.2	30.8

3.2. カラ・キルギズ人の部族区分

遊牧カラ・キルギズ人の間では、いまだに複雑な部族区分が残されており、それは遊牧生活の習慣と密接に関係している。部族は、人々の経済生活においても主要な役割を果たしている。もっとも固く結束した部族は、それと同時にもっとも裕福である。というのも、彼らはよりよい土地と牧地を手に入れることができたからである。

部族制は、カラ・キルギズ人の社会・政治的な分野においても重要な意義を持っている。ロシア

による侵略以降、郷の長官の選挙にはつねに有力部族グループ同士の熾烈な争いが付き物であった。少数部族は、このようなときには従属的な状況にあった。以前に「行政区分」の章で見たように、少数部族グループは血縁者と統合するためにつねに郷の再編成を志向した。その結果、遊牧カラ・キルギズ人の下級行政においては混乱が生じ、カオス状態にあった。

部族は、カラ・キルギズ人の外的な政治の場でも重要な役割をはたした。1898 年のフェルガナにおけるロシアに対する敵対行動⁴の際には、功名心に燃えた狂信的な部族長の影響の下、部族グループがことごとく対ロシア闘争に引き込まれたことが明らかになった。他方では、一部の部族は彼らに敵対する部族グループが闘争に参加したというだけの理由で平静を保った。

同様のことは、1916 年の蜂起の際にも起こった。また、最近ではソヴィエト政権に対するバスマチ運動においても同様なことが見られる。

それに加えて、以下のことに注意を払う必要がある。すなわち、国境付近を遊牧している多くのカラ・キルギズ部族は、中国やアフガニスタン領

内に親類縁者を持っており、彼らの行動は隣国においても反響があるのである。

したがって、実際的な観点からは、部族がどのようにグループ分けされ、彼らの人口がどのくらいであり、フェルガナ州にどのように分布しているかを知ることは非常に重要なことである。

一般に、カラ・キルギズ人は二つの系統に分類

⁴ アンディジャン蜂起のこと。ナクシュバンディー教団の導師ドゥクチ・イシャーニに率いられたムスリム集団がロシア軍兵営を奇襲した（小松ほか 2005: 52）。

される。カラ・キルギズ民族の主要な部分は、しばしば“Otuz-ogul”（30 人の兄弟⁵）と呼ばれる。異なる出自を持つもう一方の系統は、Ichkilik と呼ばれる。

“Otuz-ogul”は、オシュ郡、アンディジャン郡、ナマンガン郡のほとんどすべての遊牧地区で遊牧に携わっている。彼らは二つの翼、すなわち On（右翼）と Sol（左翼）に分かれている。この区分の時期、起源、意味については、現在まで明らかにされていない。アリストフ Аристов は、カラ・キルギズの民族構成にかんする自著（Живая старина 1894, вып. 1-4）の中で、この両翼への区分の起源と意味について、侵略軍としての人々の行動に関係があると述べている。

右翼は、オシュ郡の遊牧地区のすべて、アンディジャン郡とナマンガン郡の一部を占めている。右翼は、Adgene と Togai の二つの集団から構成されている。

Adgene は、さらに Adgene と Mongush の二つの系統に分かれている。Adgene には、フェルガナ州で見られる以下の諸部族が属している。

Borgy：グルチャ川流域を遊牧。この部族の冬営地は、カラ・クルジャ川との合流点までのタラ川上流域である。ナマンガン郡北部、ウズン・アフマト川左岸に住む大部族 Sartar は、この Borgy の一部を構成している。

Buru：フェルガナでは少数の部族。タラ川上流、アライ・ク川流域、カラ・クルジャ川流域に居住している。

Dzhory：定住地区から遠くない山麓部、クルシヤブ川流域、タラ川下流域に居住する。

Kara-bagysh：ヤッサ川下流に居住する。

Tazdar：タラ川中流の左岸に居住する。

フェルガナにおいては、Mongush の系統には二つの部族が属するのみである。

Dzhalgal'mai：コク・ス川流域の中国との国境付近、イルケシュタム砦の近くを遊牧。

Mungal：クルシヤブ川流域、カラ・クルジャ川右岸を遊牧。この部族名称は、そのモンゴルの出自と関係している。アリストフは、Mongush 系統がチャガタイ・ウルスのモンゴル人の末裔だと推測している。

Adgene 部全体では、約 5 万 2000 人の遊牧カラ・キルギズ人口が数えられる。

Togai 部は、少し人口が少なく、約 4 万 1500 人である。そのおよそ三分の二がアンディジャン郡を遊牧し、残りがナマンガン郡を遊牧している。

Togai 部のもっとも有力な部族が Sayaki（古代インド人、ペルシア人、ギリシャ人が言うところのサカ）である。彼らはスサミル谷の良い牧地を手に入れ、冬営地を広大な領域に広げた。すなわち、アンディジャン郡北部ではカラ・ウングル川上流とマイリ・ス川の間、ナリン川左岸、ナリン川とカラ・ス川の間地域、ナマンガン郡ではナリン川右岸、ウズン・アフマト川の東側の地域である。その人口数と強力さにもかかわらず、Sayaki はその出自が Togai 部の他のカラ・キルギズよりも低いものとみなされ、つねに他部族と敵対してきた。1863 年、彼らは Sary-bagysh と同盟した Sultu 部族によって略奪され、奴隷にされた。彼らは、ロシア人によるセミレチエ地方侵略後の 1868 年によく解放された。

Sary-bagysh 部族は、カラ・ス川右岸、マイリ・ス川上流（Dzhetyger 部族）、ナマンガンのカラ・ス川上流の土地を勢力下に置いている。

Sultu (Soly)：おもにセミレチエを遊牧。フェルガナでは、ただ有力部族 Uch-bagysh のみ見られる。彼らは、ヤッサ川とクガルト川の間に居住している。

Bagysh 部族は、アンディジャン郡ではおもにクガルト川流域で、ナマンガン郡ではチャトカル川流域に見られ（Kutluk-seid 部族）、ウズン・アフマト川右岸でも見られる。

Bugu：ただクガルト川流域のみで見られる。

民族学者たちの間の共通見解によれば、左翼はおもにアウリエ・アタ郡のタラス川流域を遊牧している。しかし、これは完全に正しいというわけではない。左翼に属する諸部族のうち数万のカラ・キルギズがフェルガナ州北部、アンディジャン郡とナマンガン郡でも遊牧をおこなっている。

左翼でもっとも有力な部族は、Munduz である。彼らの冬営地は、アンディジャン郡南東部の山麓部、ヤッサ川とクガルト川の間地域、およびナマンガン郡のナリン川とカラ・ス川右岸に広がっている。おそらく、チャトカル川流域を遊牧する

⁵ 正しくは「息子」

Timan-tamga 部族は、Munduz と関係があるであろう。

Kyrk-ugul' 部族は、おもにナマンガン郡のカラ・ス下流域、カラ・ス川とナリン川の間の地域に見られる。

Mendy は、カラ・ス川上流・中流域の左岸に分布する。

この川の右岸では、Munduz に混じって Togai-berdy 部族 (Kendzhe-chegetyr 部族) が遊牧している。

カラ・ス川上流域では、ナリン川に沿って Murat-ali 部族 (Satykei 部族) が分布する。

カラ・ス川下流域には Sarui 部族が分布する。この部族の冬営地はナマンガン郡にも広がる。

Basyz 部族は、ヤッサ川流域とクガルト川上流域に分布する。彼らは、しばしば民族学者によって右翼の Togai 部に関係づけられるが、実際のところ、この部族についての情報は乏しい。Basyz についての正確な情報は、ただシトニャコフスキー Ситняковский が記述しているにすぎない (Известия русского географического общества 1900)。彼は、この部族を左翼に属すものとみなし、この部族に属するすべての小氏族の名前を挙げている。したがって、シトニャコフスキーによる分類のほうがより信頼に値すると思われる。

Kutchu 部族は、オシユ郡の北部、ヤッサ川とカラ・クルジャ川の間分布する。

カラ・キルギズの主要な部分が属さない系統が Ichkilik (人口約 2 万 1000 人) であり、コーカンド郡とフェルガナ郡の山岳部、パミール管区に居住している。オシユ郡とフェルガナ郡北部では、Ichkilik はたまに見られるだけであり、目立たない。Ichkilik は以下の諸部族から構成されている。

Abagat : ライラク川上流域。

Naigut : ソフ川とイスファラ川の上流域。

Argyn (Kesek 部族) : ソフ川とシャーヒ・マルダーン川の間山麓部。

Kipchak および Teit : キズィル・ス川 (スルフ・アープ川支流) 流域とアライ山脈西部 ; パミールではラング・クル湖周辺⁶。

3.3. フェルガナ州におけるカラ・キルギズ人の分布

カラ・キルギズ人は、ただオシユ郡においてのみ人口の過半数を占める (62%)。オシユ郡では、遊牧郷 [кочевая волость] やウズゲン郷のアウル以外では、半遊牧のクルシャブ郷と定住のトゥルク郷 (ロシア人定住民を除く) において住民のほぼすべてを占めている。アク・ブラ郷で圧倒的多数を占め (88.5%)、ナウカト郷 (72.5%) やカシユガル・キシュラク郷 (71.5%) においても大多数を占める。マニャク郷 (42%) とブラクバシ郷 (24%) ではウズベク人より少なく、オシユ郷ではわずかな集団に会うだけである。このように、オシユ郡においてもフェルガナ州の他の諸郡にも特徴的な人口分布が見られる。すなわち、河川の上流域には遊牧民、中流域には定住キルギズ人、下流域にはウズベク人が分布している。

アンディジャン郡では、カラ・キルギズ人は人口の 27.5% を占めており、例外なくすべての郷に分布している。カラクル・セレスイ、ケンコル・カラギル、マイリ・サイの三つの遊牧郷では住民の 100% を占め、一部ロシア人定住民のいるチャンケント郷とクガルト郷では 85.5% と 78% を占めている。

定住キルギズ人は、フェルガナ山脈の山麓とカラ・ウングル東側のカラ・ダリヤ谷に分布している。ナウケント郷 (88%) とマッサ郷 (82.5%) では圧倒的多数を占め、バザール・クルガン郷 (60%) とアイム郷 (50.5%) では過半数を占めている。ジャララバード、ジャラル・クドゥク、カラ・ス、クルガン・テペ郷ではウズベク人に次いで人口が多い (20~40%)。

ナマンガン郡では、人口の 19% 近くを占める。遊牧郷以外では、クトルク・サイド郷の住民の 100% を占め、バグシュ郷では 82.5% を占めている。バヤスタン郷では 46%、ナナイ郷では 18.5% を構成している。ナマンガン郡における定住キルギズ人の中心は、パードシャ・アタ川とチャナチュ川の中流域である。

フェルガナ郡ではカラ・キルギズ人は比較的少なく、人口の 14% を占める。ただヤウケセク・ボスタン郷では住民のほぼすべてを占め、ナイマン

ルギズ諸部族の人口構成】の二つを省略した。

⁶ 以下、原文判読不能により詳細なデータ表 32【フェルガナ州の遊牧地区におけるカラ・キルギズ諸部族にかんする情報】と表 33【フェルガナ州における主要カラ・キ

郷 (95.5%)、イチュキリク郷 (93.5%) にも多い。アラヴァン郷ではオシュ郡との境界近くに分布し、ウズベク人に次いで 36%を占めている。

コーカンド郡ではカラ・キルギズ人は非常に少なく、人口の 4%を占めるのみである。基本的に、イスファラ川とソフ川の中流域に分布している。

パミール管区では、パミール郷に分布するのみであり、そこでは住民のほとんどを占めている(もちろん哨所の軍人は除く)。

4.1. タジク人

タジク人は、イラン系の民族で、ペルシア人と同族であり、太古からトルキスタンに居住してきた。彼らの祖先は、フェルガナ州、サマルカンド州のすべての領域、およびシルダリヤ州の南東部に住んでいた。テュルク系の侵略者たちは、タジク人を隷属させた。彼らの一部は、完全にテュルク化され、支配者の言語を受け入れた。残りの一部は、自身の母語(ペルシア語)を保持し、サマルカンド州とフェルガナ州のいくつかの都市、および支配者に追いやられてシル川、アム川、ザラフシャン川の渓谷に落ち延びた。サマルカンド州、東ブハラ、西パミールの高山地帯に住んでいるタジク人は、もっとも純粋なアーリア的な形質を保っている。

1917年には、トルキスタンにおよそ4万人[sic]のタジク人が住んでいた。その大部分はサマルカンド州のサマルカンド郡とフジャンド郡の南部、南東部の村落地帯、およびサマルカンド、フジャンド、ペンジケント、ウラテッパの諸都市で登録された。17年の統計では、フェルガナ州の村落地帯で16万7408人のタジク人が登録された。彼らは、おもに州西部(ナマンガン郡、コーカンド郡)およびパミールに住んでいる。フェルガナ州の諸都市には、約2万人のタジク人口がある。シルダリヤ州のチルチク川上流(タシュケント郡北東部)およびフジャンド郡との境界(ミールザーチュル郡南西部)にも多くのタジク人が住んでいる。

トルキスタン以外には、ブハラ共和国に約80万人のタジク人が住んでいる。ヒサル州には40万人以上が集中し、ブハラ州には約16万人、ガラム州には約13万人が集中している。

ブハラに隣接するアフガニスタン領にも数十万

のタジク人が居住しており、アフガニスタンにおけるタジク人の総数はおそらく百万人に達する。

フェルガナに住むタジク人は、二つの集団に分類できる。スンナ派の盆地のタジク人とシーア派の山地タジク人(ガルチャと呼ばれる)の二つである。盆地と山地のタジク人は宗派によって区別されるだけでなく、民族学的形態、生活習慣によっても区別される。彼らは別の方言を話し、しばしば相互理解が困難なほどである。

ガルチャは、その中でいくつかの分枝に分かれ、それぞれが独自の言葉を持っている。17年の統計では、以下のような山地タジク人が登録されている。

シュグナーン人：8,922人。パミール西部のパンジ川、およびその支流のグント川、シャーフ・ダラ川流域に居住する。シュグナーン郷のほぼ全域、ダルマラク村団(イシュカーシム郷)、バジャ村団(ルーシャーン郷)に分布する。ランガル村とゾング村(ランガル郷)では55人が登録されている。

ルーシャーン人：6,187人。パミール北西部のバルタング川(パンジ川右岸最大の支流)流域に居住。ルーシャーン郷の他にアク・タイラク村(シュグナーン郷)にも分布し、おそらくオロショル郷のすべての住民もルーシャーン人とみなすべきである(1,033人)。

ワハン人：2,193人。パンジ川上流、パミール川とワハン・ダリヤ川の合流点付近に居住する。ランガル郷の主要な住民を占めている。

ゴロン人：739人。ダルマラク村団とナマトグトの二つの村(ニュト村とレン村)を除くイシュカーシム郷に居住する。17年の統計では、バダフシャーン人・ゴロン人と自称しているが、おそらくかつてパミールにほど近いアフガニスタン側のバダフシャーン・ハン国に臣従していたことを示しているのだろう。

イシュカーシム人：323人。イシュカーシム郷のニュト村とレン村に居住。

4.2. フェルガナ州におけるタジク人の分布

タジク人が多く住んでいる西パミールを除くと、タジク人は西フェルガナの村落地帯に多く居住し、東部の郡では住民の1%以下である。

オシュ郡ではカシュガル・キシュラク郷にのみタジク人は居住し（5%）、オシュの町の住民の数を占める。

アンディジャン郡では、アイム、アルトゥン・クル、コカン・キシュラク、ナウケントの4郷で登録され（1.5～9%）、もっぱらクガルト川下流のカラダリヤ川流域に分布している。

フェルガナ郡ではタジク人は比較的多く 9.5%を占めるが、その多くはアウヴァル郷に居住する（53.5%）。かなりの人口（10～24%）がコカン・キシュラク、マルハマト、セガザ、チムヤーン、シャフリ・ハン、ヤズ・ヤヴァン郷でも登録されている。アルトゥ・アリク、アサカ、クヴァ、マルギラン、ヤッカトゥートの五つの郷でも比較的小数の集団が認められる（2～8.5%）。

フェルガナ郡のすべての定住地域において、タジク人は圧倒的多数のウズベク人の間に島のように点在している。

ナマンガン郡ではタジク人は 13.7%を占める。カーサーン郷の住民のほとんどはタジク人であり（97%）、ババ・ダルハン郷（76.5%）とアシュト郷（61.5%）では多数を占め、ヴァルザ郷では半分近くを占めている（48%）。バヤスタン、テルガウチ、チャダク、チュストの各郷にも数千人が分布している（13.5～25%）。

コーカンド郡ではタジク人は 16.5%と最も多い。彼らは三つの大きなタジク人オアシス、すなわちソフ（96%）、イスファラ（82.5%）、カーニバーダーム郷（73.5%）に集中している。多くの人口がマフラム郷のフジャンド郡との境界付近（37.5%）、リシュタン郷のフェルガナ郡との境界付近（28%）に居住している。さらに、いくらかの集団がベシュ・アリク、ケネゲス、クラシュ、ヤイパン郷の村々に分布している（2～8%）。

5. キプチャク人

フェルガナのキプチャク人は、モンゴリアから西方に移動してきた遊牧テュルク人の末裔の一部である。多くの民族学者は、彼らを古代ルーシを攻撃したポロヴェツと同民族であると考えている。彼らは東からチングス・カンに圧迫されてさらに西に至り、ほかの民族とともにバシキール人、ノガイ人、タタール人などの民族を形成した。キプ

チャクの地に残った大部分の者たちはジョチ・ウルスの一部となった。15世紀中ごろ、キルギズ・カザク連合が形成される時期にはキプチャクの一部はこの連合に加わった。また、多くがウズベク・ハンの後裔のもとに残り、16世紀初めに他のウズベクの親衛隊とともに河間地域に流れ込み、フェルガナを征服した。

すなわち、キプチャク人は、ヨーロッパ・ロシアとトルキスタンのほとんどすべてのテュルク系諸民族の構成員の一部となった。しかし、フェルガナにおいてのみ、定住キプチャク人は、ウズベク人やキルギズ人との同一性を区別しながら、自身を他の諸民族に対置している。このことは、彼らがコーカンドのハンたちのもとで果たした政治的役割によって説明できる。彼らはフェルガナにおいて支配集団であり、つねにハン国の内政に関与し、隣国への襲撃にも参加した。彼らは、他のウズベク諸部族と混交することを避け、これにより彼らはウズベク人と外見上も著しく異なるのである。しかし、言葉と生活習慣はウズベク人とほとんど同じである。

1917年の統計では、フェルガナで4万2449人のキプチャク人が登録されている。ここには、カラ・キルギズ人と完全に同化し、「クルグズ・キプチャク」あるいは単に「クルグズ」と自称するキプチャク部族の遊牧キルギズ人は含まれていない。

キプチャク人はそのほとんどがフェルガナ北部に分布している。大部分がアンディジャン郡に居住し（郡の定住人口の7.5%）、ナリン川とマイリス川の下流域の諸郷に分布する（22.5～27%）。数千人のキプチャク人が、バリクチ、カラ・ス、クルガン・テペ郷にも住んでいる（10～11.5%）。

ナマンガン郡では、キプチャク人は 3.9%を占める。その四分の一近くがチャダク川流域に居住し（チャダク郷住民の24%）、カーサーン川流域のテルガウチ郷（15.5%）、スムサル川流域のヴァランク郷（11.5%）、ナマンガン・サイ川流域のヤンギ・クルガン郷（10%）にも分布する。

フェルガナ郡とコーカンド郡にはキプチャク人はわずかに居住するのみである。

6. カラカルパク人

カラカルパク人は一度も独立した国家を形成せ

ず、他の民族の歴史にもほとんどかわらなかったために、カラ・キルギズ人と比べても歴史的情報が乏しい。

かつてカラカルパクは強大で、ヨーロッパ・ロシアの草原で遊牧し、キエフ・ルーシを襲撃したと考えられている。これについては、11～12世紀のロシアの年代記作者たちが漠然と言及しており、この遊牧民を「黒い頭巾」と呼んでいる（「カラ・カルパク」とは、「黒い帽子」の意味である）。カラカルパク人自身の間でも、「アストラハン王国とカザン王国の間にあるヴォルガのノガイ（タタール）のくに」における彼らの祖先の生活についての記憶が保持されている。

16世紀にロシアがヴォルガ川を越えて進出したとき、カラカルパク人はアラル海北方とシル川下流に退いた。ここで彼らは18世紀初頭まで遊牧していた。北と東からキルギズ・カザクに圧迫されて、さらにアム川河口まで退き、そのデルタ地帯にとどまった。カラカルパク人はウズベク人やキルギズ人と頻繁に混交した。現在タシュケント付近やフェルガナ州、サマルカンド州に住んでいるカラカルパク人が、そのような人々に帰せられると考えるのは、おそらく正しいであろう。

カラカルパク人の一部は、キルギズ・カザクとの戦いの中でコーカンド人によって捕虜にされ、フェルガナに奴隷として連れてこられた。ここで彼らはウズベク人の中にほとんど溶け込んだが、一部は自分たちをウズベク人と区別し、自身をカラカルパクと呼び続けている。

多くのカラカルパク人が、ザラフシャン渓谷を占領したウズベク人集団の一員となった。彼らは完全にウズベク人に同化し、最大のウズベク部族の一つとなり、現在はおもにザラフシャン川オアシスの西部に居住している。

数千人のカラカルパク人が（おそらく、彼らもかつてのコーカンド人による捕虜であった）、タシュケント郷のシル川支流、ケレス、チルチクに生き残っている。現在、彼らは呼称以外ではその地のキルギズ・カザクとほとんど変わらない。

しかし、カラカルパク人の主要集団であるアムダリヤ州に住む人々は、疑いなく特別な民族集団である。彼らの言語は、ウズベク語とキルギズ・カザク語の中間であり、ヴォルガ・タタールの言

語とも何ら共通点を持たない。彼らの外見はウズベク人およびキルギズ人とは異なる。背は高く、顔は大きく平らで、頬骨が出ていて、アーリア人との混血の跡がよりはっきりと見て取れる。

トルキスタン領外においては、カラカルパク人はホラズム共和国に居住している。現在そこには2万人のカラカルパク人がいると考えられる。

すべての遊牧民と同様に、カラカルパク人はかつて多くの部族に分かれていた。彼らは200年も前に定住化しているが、現在でも彼らの間には遊牧民にみられる血縁集団の呼称が残っている。部族の名称は、ウズベク人、キルギズ人、一部のトルクメン人の部族名とよく似ている。

カラカルパク人の全体数は10万人近いと考えられる。そのうちフェルガナ州では、1917年の統計で1万735人が登録されている。

フェルガナ州においては、彼らはほとんどがフェルガナ盆地の中央部、すなわちカラダリヤ川とナリン川の合流点付近およびシル川沿岸に居住している。

7. ロシア人

1917年の統計でも1916年の統計でも、大ロシア人 [великоросс]⁷、ウクライナ人、ベラルーシ人の人数を把握することはできない。というのは、何百万の現地人の中におかれたこれらの移住者は、ウクライナ人や大ロシア人としてではなく、ただ単に「ロシア人」[русский]として自己認識するようになるからである。実際に1917年の統計で記録された1万2597人のロシア系住民のうち、半数以上が単に「ロシア人」と回答している。[表34]

⁷ 帝政時代に、同じスラヴ系であるウクライナ人やベラルーシ人から、敢えてロシア人を区別する必要がある際に使用された呼称。

表 34 【ロシア系住民の民族別構成】

郡	大ロシア人	ウクライナ人	ベラルーシ人	ロシア人	合計
アンディジャン郡	859	4,224	41	1,400	6,524
コーカンド郡	63	63	--	2,204	2,330
ナマンガン郡	50	457	--	713	1,220
パミール管区	1	--	--	1	2
フェルガナ郡	235	347	--	2,299	2,881
合計	1,208	5,091	41	6,617	12,597

この表のデータからは、ロシア人移住者の大半が大ロシア人ではなくウクライナ人であることが明かである。フェルガナ地方へのロシア人の移住者は、フェルガナ州東部のアンディジャン郡とオシュ郡に集中しているが、どちらの郡においても定住民の 2% にも満たない。

アンディジャン郡では、ロシア人移住者の約半数がクガルト郷に居住している（郷住民の 21%）。また、多くの集団がチャンケント郷に居住している（12%）。

オシュ郡では、アクジョル郷（7%）、クルシャブ郷（9%）、ヤッサ郷（15.5%）に分布している。フェルガナ郡では、ロシア人村（マルハマト郷の 7%）以外では、ただ綿花産業の主要地のみ、すなわちアサカやクヴァの村々に居住している。

コーカンド郡では、少数の集団がアラヴァン、ベシュ・アリク、カイナルの各郷で登録されている。

ナマンガン郡では、ただ二つのロシア人入植地、アルイム郷とバグシュ郷（それぞれ 9.5% と 7%）に居住している。

8. その他の民族

その他の少数民族の中では、タタール人（448 人）、ジプシー（ルーリー、429 人）、カルムイク人（253 人）が目立つ。

参考文献

- 植田暁 2013 「帝政ロシア支配期のクルグズの社会経済的変容：フェルガナ州における天水農耕の普及を中心に」『内陸アジア史研究』28: 101-126。
- 帯谷知可 2012 「『民族』の成立と国境画定：中央アジア」帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣（編）『中央アジア』（朝倉世界地理講座 5）朝倉書店、183-195。
- 小松久男・後藤寛 2009 「中央アジアの動態を読む：GIS による地域研究の試み」水島司・柴山守（編）『地域研究のための GIS』古今書院、95-112。
- 小松久男ほか（編）2005 『中央ユーラシアを知る事典』平凡社。
- 島田志津夫（訳・解題）2016 「V.V.バルトリド「タジク人：歴史的概説」」『東京外国語大学論集』92: 305-330。
- МВП: 1924, *Материалы всероссийских переписей. Перепись населения в Туркестанской Республике. Выпуск IV-й. Сельское население ферганской области по материалам переписи 1917 г.*, Ташкент: Издание ЦСУ Туркеспублики.